

小松表とおもて と今江縞おしま

小松における畳生産は、寛正元年（一四六〇）頃、吉竹村（小松市吉竹町）釜見谷の清右衛門が大野村（小松市大野町）に自生していた藺草いぐさを移植して栽培したのが始まりである。



小松表(小松市白江町 宮本隆史氏提供)



明治17年(1884) 能美郡藺筵組合事務所

江戸時代以降農家の副業として藺草栽培、刈り取り、乾燥、泥染め、莫座ござ拵ぎざうちまで行ってきた。藺草栽培と並んで

莫座拵ちの主な工程(『民家検券図』(石川県立図書館所蔵)より)



莫座う拵ち



麻糸を紡ぐ



藺草刈り



莫蔴を搦つ 足踏み機(小松市立博物館蔵)

良好で消費者に好まれて高級品質の「小松表」として評価されている。

丈の短い藺草は「莫蔴帽子」などに加工され民具として愛用された。

現在は小松市白江町の農家が刈り取り、乾燥、泥染め、莫蔴搦ちの工程をそれぞれ機械化して生産している。

今江の木綿織物は天保年間から農家の副業として始まっていた。栽培した綿花を手引紡車で綿糸とし、これを高機にかけて白木綿を製織し、小松町の問屋へ売っていたが、安政年間からは須天村の紺屋で綿糸を藍で染めて持ち

縦系になる麻栽培、麻糸紡ぎを行った。小松産の藺草は寒冷地にて育つために表皮が厚くなり耐久性が

帰り、織機にかけて紺無地または縞ものを織り上げて販売した。

明治十年(一八七七)の生産高は二五〇〇匹であった。

明治二十年に今江村の与平がバツタン機に綿糸をかけて製織を始め、明治二十五年早くも今江織物組合を設けて製品の検査をおこなった。

明治四十年には愛知県から導入した

木綿織物の主な工程(『民家検券図』より)



木綿布を織る



木綿糸を紡ぐ

足踏み力織機が広く普及して生産高が向上した。「今江縞」として庶民に愛用されたが、現在は生産されていない。

(天丸博雄)



今江縞反物(小松市立博物館所蔵)



今江縞の長着(小松市立博物館所蔵)